

## NICU に入院経験のある低出生体重児の母親が肯定的な感情を抱くきっかけ

垣口 恵美<sup>1</sup>・寺崎 成美<sup>2</sup>・森藤香奈子<sup>3</sup>・山本 直子<sup>3</sup>  
中尾 優子<sup>3</sup>・田中 初美<sup>1</sup>・土居美智子<sup>4</sup>・荒木 美幸<sup>3</sup>

**要 旨** NICUに入院経験のある低出生体重児の母親28名を対象に、児に対して肯定的な感情を抱くきっかけについて質問紙調査を行った。児に関する内容としては【児とのふれあいや存在】、【授乳時の児の成長・児の状態改善】、医療者や夫に関する内容としては、【児の成長や出来事に関する情報提供や記念品の提供】、【夫や周囲からのサポート】、【医療者からの児への関わり】が抽出された。

つまり医療者の効果的な介入法としては、児と会えない時間が多いことを配慮し、「児の状態を伝え、児との関わりを促すような働きかけ」、「母親の児への授乳の積極的な支援」、「児への適切なケア」、「父親が母親へサポートできるような支援」などが考えられた。

保健学研究 26 : 7-13, 2014

**Key Words** : 肯定的な感情 低出生体重児 NICU

(2013年8月30日受付)  
(2013年11月2日受理)

## I. はじめに

出産は、両親にとって家族が増えるというとても大きな嬉しい出来事である半面、その後の育児や児が健康に成長できるかといった不安やストレスにもつながる。日本の産科学や新生児医療の発達、高齢出産の増加などにより、2,500g未満の出生児（以下、低出生体重児とする）の出生総数に対する割合は1980年に5.2%、1990年に6.3%、2000年に8.6%、2009年に9.6%と増加をたどっている<sup>1)</sup>。低出生体重児は、出生直後から新生児集中治療室（Neonatal Intensive care Unit：以下NICUとする）に入院し、保育器に収容され、人工呼吸器や点滴、バイタルサインのモニタリングなど高度医療が開始される。両親は、子どもの誕生後早期に親子の分離を余儀なくされ、親子関係・家族関係の形成はさらに困難なものとなる。さらに低出生体重児は周産期死亡率も高く、長期的予後からも後障害や罹患率が高率であり家族の受ける精神的・経済的負担も大きい<sup>2)</sup>。

藤野ら<sup>3)</sup>は「超・極低出生体重児を持つ親の否定的感情からの脱出契機は、児と面会し触れ合うことや、一生懸命に児を救命している医療従事者の誠実な態度や良くしてくれる看護師からの励ましから脱出契機を得ていた。」と述べるなど、両親の児に対する不安への支援や援助について研究が行われている。

一方、育児を行う際、肯定的な感情があれば育児不安があってもそれが喚起されることはなく、また、肯定的

な感情のようにポジティブな側面に働きかけることで間接的にネガティブな感情が低下すること<sup>4)</sup>、さらにサポートの受容が育児肯定感のようなポジティブな側面に働くことで間接的にネガティブな感情を低めることに役立っていることが報告されている<sup>5)</sup>。つまり母親の肯定的な感情に働きかけることで、否定的な感情を軽減することができると考えられる。しかしながら、親の不安など否定的感情の軽減やそれらに対する必要な支援に関する研究はなされているものの、肯定的な感情について焦点を当てた研究はほとんどみられない。そこで本研究では、NICUに入院していた児をもつ母親が肯定的な感情を抱くきっかけを明らかにし、NICUに入院中の母親が児に対して肯定的な感情を抱くような医療者の効果的な介入方法を明らかにすることを目的とした。「肯定的感情」とは、喜び、幸福感、熱意、満足感、安らぎなどの快い感情経験と定義した。

## II. 研究方法

1. 対象：大学病院（1施設）のNICUに入院経験のある低出生体重児の母親で、NICUを退院後3か月以上経ち、研究への同意が得られた者37名とした。

2. データの収集方法・手順

1) 児がNICU退院後、フォローアップのため小児科外来受診された際に口頭および文書によって研究の主旨と方法を説明し、同意が得られた母親に自己記入式質

1 長崎大学病院

2 福岡赤十字病院

3 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻

4 独立行政法人国立病院機構長崎医療センター

問調査用紙および切手を貼った返信用封筒を配布した。回収は返信用封筒を用い住所等無記名にて郵送してもらい、返信をもって同意とみなした。研究対象の候補者についてはNICU担当小児科医師が、母子ともに身体的・精神的に安定しており、調査依頼可能と判断された母親とした。調査期間は2011年7月から2012年1月であった。

## 2) 調査項目

(1) 母親の属性 (初産・経産の別, 出産時の母親の年齢, 出産場所), (2) 児の属性 (何人中何番目の児, 現在の児の年齢, 出生時体重, NICUへの入院期間, 疾患名 (手術のある方のみ)}, (3) 母親が児の入院中に抱いた肯定的感情に関するエピソード」について (自由回答)

## 3. データの分析方法

対象の属性については単純集計を行った。自由回答についてはKrippendorff (1980/1989) の内容分析法を参考にして行った<sup>6)</sup>。内容分析とは、コミュニケーションの明示的内容の客観的、体系的かつ数量的記述のための調査技法である<sup>7)</sup>。つまり「量化」することで研究の科学性や客観性を保証するためにこの方法を用いた。自由回答の中から「母親が児の入院中に抱いた肯定的感情に関するエピソード」を示す記述を抜き出し、簡潔にしたものをコードとした。コード72単位について内容分析した。次にコードの内容の類似性に従って分類し抽象化の作業を経て、カテゴリー名をつけた。これをサブカテゴリーとし、さらに意味内容の同質性、異質性に基づき集約、意味内容を損なわないよう抽象度をあげ、カテゴリー名をつけた。カテゴリー分類の精度を上げるためにカテゴリー分類や命名の精選を繰り返した。データ分析は、おもに2名の研究者が行い、他2名の研究者にスーパーバイズを受け、信頼性を確保するように努めた。

## 4. 倫理的配慮

長崎大学医学部保健学科倫理委員会の承認を得て実施した (審査承認番号11071451)。研究の主旨と方法を説明し同意が得られた母親に質問調査用紙および切手を貼った返信用封筒を配布した。対象者への調査は無記名とし、個人のプライバシーを保持すること、調査への協力は自由意思であり、母親からの返送をもって研究協力の同意とみなすこと、さらに強制力はなく協力を辞退されても何ら不利益を被ることなく、研究目的以外には使用しないことを文書にて約束した。

## Ⅲ. 結果

### 1. 対象の概要 (母親および児の属性) (表1)

調査用紙を配布した37人中28人からの回答が得られた (回収率75%)。

母親の属性については、経産婦よりも初産婦が多く、6割以上を占めていた。出産時の母親の年代は30代が最も多く20人 (71%) であった。出産場所は7割以上が大学病院であった。

児の属性については、現在の年齢は、生後4か月以上2歳3か月未満であり、出生時体重は2,000g以上2,500g未満が最も多く13人 (46%) であった。NICUの入院期間は1か月以上2か月未満が最も多く11人 (39%)、次に2か月以上3か月未満8人 (29%) が多かった。入院中に手術を行った児は2人 (7%) であり、9割以上の児は外科的な手術は行っていない。

### 2. 母親が児の入院中に抱いた肯定的感情に関するエピソードについて (表2～表4)

母親が肯定的な感情を抱いた場面は面会時が最も多く22名 (79%) であった (表2)。母親は「嬉しい」「安心」「感謝」「前向きな気持ち」等の感情をいただいていた (表3)。

表1. 対象者の概要 (母親および子どもの属性) n=28

母親	
初産・経産の別	初産婦17人 (61) 経産婦11人 (39)
出産時の母親の年代	10代1人 (3) 20代6人 (21) 30代20人 (71) 40代1人 (3)
出産場所	大学病院20人 (71) 他施設8人 (29)
子ども	
現在の年齢	4か月以上2歳3か月未満
出生時体重	1,000g未満 2人 (7)
	1,000g以上1,500g未満 8人 (28)
	1,500g以上2,000g未満 8人 (28)
	2,000g以上2,500g未満 13人 (46)
NICU入院期間	1か月未満4人 (14) 1か月以上2か月未満11人 (39)
	2か月以上3か月未満8人 (29) 3か月以上5人 (18)
入院中の手術の有無	あり2人 (7) なし26人 (93)

( ) %

表2. 母親が肯定的な感情を抱いた場面

面会時22人 (79) 夫と話している時4人 (14) 出産時3人 (11) 自宅2人 (7)
面会時の様子をとったビデオをみている時2人 (7)
その他3人 (11)  周囲からの連絡や声かけ, 他の患児の母親との談話, 退院時
複数回答 ( ) %

表3. 印象的なエピソードについて感じたこと

嬉しい26人 (93) 安心23人 (82) 感謝5人 (18) 前向きな気持ち5人 (18)
感動4人 (14) 愛おしい4人 (14) 児の生命力を感じた3人 (11)
その他5人 (18)  自分の必要性を感じた, 無事に出産できたことは肯定できた スタッフの愛情を実感できた
複数回答 ( ) %

表4. 母親が肯定的な感情を抱くきっかけについて

カテゴリー	サブカテゴリー	単位数
児とのふれあいや存在 25 (34.7%)	児の反応	9
	児とのふれあい	9
	児の存在	7
授乳時の児の成長・児の状態改善 23 (31.9%)	授乳時の児の成長	13
	児の状態改善	10
児の成長や出来事に関する情報提供や 記念品の提供 11 (15.3%)	児の成長や出来事に関する情報提供	8
	記念品の提供	3
夫や周囲からのサポート 8 (11.0%)	夫の児への愛情とサポート	6
	周囲からのサポートや交流	2
医療者からの児への関わり 5 (6.9%)	医療者からの児への関わり	5

複数回答 ( ) %

自由回答から母親が肯定的感情を抱いたエピソードについて内容を分析した結果、72の内容を抽出、さらにこれらのコードから10サブカテゴリーと5カテゴリーに分類された(表4)。各カテゴリーについては【 】はカテゴリー、《 》はサブカテゴリー、コードについては「 」で示した。NICUに入院していた児をもつ母親が肯定的な感情を抱くきっかけとして、《児とのふれあいや存在》、《授乳時の児の成長・児の状態改善》、《児の成長や出来事に関する情報提供や記念品の提供》、《夫や周囲からのサポート》、《医療者からの児への関わり》の5つのカテゴリーに分類された。

(1) 【児とのふれあいや存在】

このカテゴリーは母親が児の入院中に抱いた肯定的感情に関するきっかけとして最も多く、対象の34.7%がこのカテゴリーに該当した。つまり児と直接ふれあうこと、児が元気に存在していることであった。これは、《児の反応》、《児とのふれあい》、《児の存在》という3つのサブカテゴリーから構成された。《児の反応》というサブカテゴリーについては「保育器の中に手を入

れて赤ちゃんの手をさわったら、私の手をぎゅっと握ってくれた」、「声を出して笑ってくれた」、「赤ちゃんの泣き声がきけた時」など母親の手を握ってくれたり、笑ったり、泣いていたりしている児の反応をきっかけに児の力強さを肯定的感情として認識していた。《児とのふれあい》というサブカテゴリーについては、「はじめて抱っこできたとき」「出産後、はじめて赤ちゃんにふれることができた」など抱っこしたりふれあう事で母親になったという喜びや無事に生まれてきてよかったと感じていた。《児の存在》というサブカテゴリーについては、「無事に生まれたこと」、「いつものように面会時間を過ごせたとき」など、児が元気にうまれたこと、児が元気に存在することに肯定的感情を抱いていた。

(2) 【授乳時の児の成長・児の状態改善】

このカテゴリーは授乳時にみられる児の成長や児の状態の改善であり、対象の31.9%がこのカテゴリーに該当した。これは《授乳時の児の成長》、《児の状態改善》という2つのサブカテゴリーから構成された。《授乳時にみられる児の成長》というサブカテゴリーについては

「初めて直接授乳した時」、「哺乳力が弱くても一生懸命飲もうとしてくれていた時」、「ミルクを飲む量が増えたとき」など授乳をとおして、児の力強さ、児のたくましさを感じていた。《児の状態改善》というサブカテゴリーについては「体についていたモニター・チューブ類が外れた時」、「酸素がなくなったりNICUからGCUに移床していたこと」、「保育器からベッドに移ったとき」など、母親の目にみえる形で児の状態が改善していることであった。

### (3) 【児の成長や出来事に関する情報提供や記念品の提供】

このカテゴリーは母親が面会できない時間帯での児の反応や成長など医療者からの情報提供、また児の沐浴時の写真などの記念品の提供であり、対象の15.3%がこのカテゴリーに該当した。これは《児の成長や出来事に関する情報提供》、《記念品の提供》という2つのサブカテゴリーから構成された。《児の成長や出来事の情報提供》というサブカテゴリーについては「看護師さんに、決められたミルクの量だけでは足りず、泣いてもっと欲しそうだったと聞いた」、「睡眠のリズムが安定してきて、『夜まとめて眠るようになってきましたよ』といわれた」、など面会時に児の元気さについて声かけをしてもらったり、面会以外の時間帯の児の元気な様子をきくなどして、安心感を抱いていた。《記念品の提供》というサブカテゴリーについては、「看護師さんが沐浴中の写真を撮ってくれた」、「退院の日、先生や看護師さん皆に見送られ、卒業証書もらった」、「入院中、看護師さんが子どもの成長記録と写真やイラストを描いて、交換日記をつけてくれたこと」など、児の入院中の写真や成長の記録など医療者からの提供があがっていた。

### (4) 【夫や周囲からのサポート】

このカテゴリーは夫のサポートや、夫の児への愛情、また周囲からのサポートであり、対象の11%がこのカテゴリーに該当した。これは《夫の児への愛情とサポート》《周囲からのサポートや交流》という2つのサブカテゴリーから構成された。《夫の児への愛情とサポート》というサブカテゴリーについては、「はじめての面会を主人がしてきた後の、主人のすごく嬉しそうな顔と『すごくかわかった』と言っていたこと」、「夫はいつも面会に行くと両手をクベースの中に入れて息子を包み込むように手をあてていた」、「夫がどんなに仕事があつても眠くても毎日一緒に面会に来てくれた」などと、夫が示す児への愛情を母親は支えとして認識していた。《周囲からのサポートや交流》というサブカテゴリーについては、「とりに入院している赤ちゃんのお母さんと話したこと」、「周囲の人が出産後、おめでとうよく頑張ったと声かけをしてもらったり、メールをくれたこと」などと周囲からの声かけ、NICUに児が入院中の母親との会話、さらに出産についての賞賛が励みとなっていた。

### (5) 【医療者からの児への関わり】

このカテゴリーは医療者からの児への関わりであり、対象の6.9%がこのカテゴリーに該当した。《医療者からの児への関わり》、という1つのサブカテゴリーであった。これは「わが子が看護師の方に抱っこひもで、抱っこしてもらっているのを見ることができた時」、「ベッドまわりが整理されていた」など、医療者の児に対する行為に対し信頼と安心感をいただいていた。

## IV. 考察

本研究では「肯定的感情」を鍵概念にし、質問紙調査を行い、NICUに入院していた児をもつ母親が肯定的な感情を抱くきっかけを明らかにし、NICUに入院中の母親が児に対して肯定的な感情を抱くような医療者の効果的な介入方法を明らかにすることにした。結果としては母親が肯定的な感情を抱くきっかけについては「児に関する内容」と「医療者や夫に関する内容」の2つに分けられた。以下、それぞれの内容について医療者の効果的な介入方法について考察する。

### 1. 児に関する内容

NICUに入院していた児をもつ母親が肯定的な感情を抱くきっかけとなったのは「児とのふれあいや存在」であった。つまり、これまでの研究でも、母親自身が児を見る、児に触れるといった児への直接的な関わりが大切であることを述べており<sup>8-10)</sup>、児をふれること、また児の存在そのものが愛おしく、また力強く感じていた。よって母親が視覚、触覚、嗅覚、聴覚などの五感を介して児との直接的な接触ができるよう医療者が促していくことはとても大切であると思われる。

次に「授乳時の児の成長・児の状態改善」が、母親の肯定的な感情を抱くきっかけとなっていた。授乳には、児の哺乳力から生命力を感じ、母親としての自信回復や安心感が促進されるという利点が明らかにされており<sup>11)</sup>、本研究結果においても授乳時の児の成長が肯定的感情へのきっかけとなっていた。また、本研究の対象児の半数が2,000g以上の体重がある児であり、直接授乳できる状況にある児が多かったことから、直接授乳を行うことができた母親も多く、児の力強さを直接感じることができたのではないかと考えられる。母親の中には、看護者からの乳房マッサージや搾乳により母乳量が増えたことも肯定的な感情へのきっかけとなっており、母親への母乳育児促進のための介入は母親としての自信につながることからとても重要だと考えられた<sup>12)</sup>。さらに先行研究においては、早産児の母親は児の成長に喜びを感じたり<sup>13)</sup>、極低出生体重児の母親は、児の状態安定に気付いたことがきっかけとなり肯定的表現をするようになったとある<sup>9)</sup>。とくに、「児の状態改善」についてはNICUに入院し治療を受けている児をもつ母親の特徴であると考えられる。つまり、医療者は、NICUに入院している児をもつ

母親に対して児の状態の改善について積極的に母親に伝えることが重要であり、とくにモニターやチューブをはずすことができたり、酸素がなくなることは、母親にとって児の状態が改善したことを視覚的に実感できるため、このことを認識した上でタイミングよく介入することも大切であると考えられる。

## 2. 医療者や夫に関する内容

NICUに入院していた児をもつ母親が肯定的な感情を抱くきっかけとなったのは、「児の成長や出来事に関する情報提供や記念品の提供」であった。これもNICUに入院している児をもつ母親の特徴であると考えられる。つまり早産児をもつ両親は、医療関係者から提供される以上の情報を望んでいるといわれており<sup>14)</sup>、母子分離の弊害を最小限にするために、面会時の介入として日々の児の成長や様子、状態についてはできるだけ詳細に伝えていくことが重要である。また沐浴時の写真や卒業証書、特に交換日記は離れている児の様子や医療者と母親の意見交換ができ、よいコミュニケーションツールとして機能しており、これらの活用も取り入れていくことは大切である。

次に、母親が肯定的な感情を抱くきっかけになったのは、「夫や周囲からのサポート」であった。夫の励ましや積極的な児への関わり、児への愛情表現は児に対する心配や不安を二人で分かち合い乗り越えられるという安心感につながっていた。夫の父親としての成長も母親の自己効力感につながる事が分かっており<sup>11)</sup>、夫が父親として一緒に児を見守っていく姿勢であることを実感することで、母親は肯定的感情を抱いたということが考えられる。父親の面会時にはリラックスして、父親が子どもと面会できるような環境をつくり、児への愛情表現、母親への気遣い、児に対する積極的関わりなどの働きかけができるよう医療者が見守ることも母親へのサポートにつながっていくと考えられた。

次に母親が肯定的な感情を抱くきっかけになったのは、「医療者からの児への関わり」であった。このようなかわりは、子育ての先輩からの子育てモデルの提供であり、親役割習得を促進することにつながると考えられる<sup>15)</sup>。医療者からの適切なケアを母親が目で見ることができ、児と会えない間も安心して児をNICUに預けることができ、そのことが安心感へとつながったのではないかと考えられた。

今回の調査ではNICUに入院していた児をもつ母親が肯定的な感情を抱くきっかけについて調査した結果、児に関する内容としては【児とのふれあいや存在】、【授乳時の児の成長・児の状態改善】、医療者や夫に関する内容としては、【児の成長や出来事に関する情報提供や記念品の提供】、【夫や周囲からのサポート】、【医療者からの児への関わり】という5つのカテゴリーが抽出され、母親はこれらをきっかけとして「嬉しい」「安心」「感

謝」といった肯定的な感情を抱くようになっていた。

つまり医療者の効果的な介入法としては、児と会えない時間が多いことを配慮し、「児の状態を伝え、児との関わりを促すような働きかけ」、「母親の児への授乳の積極的な支援」、「児への適切なケア」、「父親が母親へサポートできるような支援」など肯定的感情を促進・強化するような介入を行うことである。これらの介入は母親のネガティブな感情を低下させ、スムーズな家族関係の構築へと繋がっていくのではないかと考えられた。

## VI. 研究の限界と課題

本研究では対象者の数が少ない。また児のNICUへの入院期間や退院してからの期間に幅があるため、肯定的な感情に影響を及ぼす可能性がある。研究の信頼性を上げるために、今後は対象者数を増やすことや、入院期間や調査時期を一定期間に限定する必要がある。

## V. まとめ

NICUに入院経験のある低出生体重児の母親28名を対象に、児に対して肯定的な感情を抱くきっかけについてアンケート調査を行った。

NICUに入院している低出生体重児の母親が肯定的な感情を抱くきっかけは、【児とのふれあいや存在】、【授乳時の児の成長・児の状態改善】、【児の成長や出来事に関する情報提供や記念品の提供】、【夫や周囲からのサポート】、【医療者からの児への関わり】の5つのカテゴリーに分類された。

## 謝辞

本調査にご協力いただいたお母様方に感謝申し上げます。なお、本研究は、第53回日本母性衛生学会総会で発表した一部に加筆・修正したものである。

## 文献

- 1) 出生に関する統計（平成22年）厚生労働省（オンライン）〈入手先〉  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/syussyo06/syussyo2.html#05>（2013.10.5）
- 2) 住田裕他：在胎22週、23週に出生した超早産児の予後、日本未熟児新生児学会雑誌、11、31-38、1999。
- 3) 藤野百合、大平光子、中山美由紀、末原紀美代：超・極低出生体重児を持つ親の否定的感情からの脱出契機。日本助産学会誌、19：70-71、2006。
- 4) 高橋道子、園田陽子：育児への肯定的感情にソーシャル・サポートが与える影響。東京学芸大学紀要、59：171-181、2008。
- 5) 荒牧美佐子、田村毅：育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャル・サポートの規定要因—幼稚園児を持つ母親の場合—。東京学芸大学紀要6部門、55:83-93、2003。

- 6) Krippendorff, K. /三上俊治他訳：メッセージ分析の技法 内容分析への招待. 勁草書房, 東京, 1989, 37-48.
- 7) 有馬明恵：内容分析の方法, ナカニシヤ, 京都, 2007, 2-3.
- 8) 横田正夫, 下田あい子, 今関節子：NICUに入院した児の両親の不安と両親への援助. 日本新生児看護学会誌, 6：2-8, 1999.
- 9) 藤本栄子, 城島哲子, 宮谷恵, 黒野智子, 谷口通英, 松本真理子, 村木ゆかり, 小倉弘子, 築地真弓, 萩原美子, 白柳安代, 筒井雅恵：極低出生体重児の母子関係と看護援助. 日本新生児看護学会誌, 6：16-24, 1999.
- 10) 下田あいこ, 戸部和代, 今関節子, 横田正夫：NICUに入院した児の母親と正常分娩をした母親の不安・愛着の比較. 日本新生児看護学会誌, 8：45-52, 2001.
- 11) 石井歩, 石川紗也, 品川陽子：極低出生体重児をもつ母親の自己効力感に影響を与える要因. 第38回日本看護学会論文集 小児看護：194-196, 2008.
- 12) NICUに入院した新生児のための母乳育児支援ガイドライン（解説編）日本新生児看護学会 日本助産学会 平成22年4月（オンライン）＜入手先＞  
<http://square.umin.ac.jp/jam/bonyuikujisien%20gaidorain.pdf#search='NICU+%E6%AF%8D%E4%B9%B3%E8%82%B2%E5%85%90'> (2013.8.20)
- 13) 西海真理：早産児を出産した母親が児との関係を育むということ. 日本新生児看護学会誌, 8：23-35, 2001.
- 14) Brazy J.E, Anderson BM, Becker PT, Becker M: How **parents** of premature infants gather information and obtain support..Neonatal Network, 20:41-48, 2001.
- 15) 布施和枝, 小澤未緒, 鈴木智恵子, 平田貴子, 岡崎有希, 畠山真由子：タッチケアが早産体験をした母親の心理状態に及ぼす影響に関する臨床研究—NICU・GCUからの子どもの退院を控えた母親を対象に—. 小児保健研究, 6:731-736, 2011.

## Promoting positive maternal feelings toward low-birth-weight infants admitted to the neonatal intensive care unit

Megumi KAKIGUTI<sup>1</sup>, Narumi TERASAKI<sup>2</sup>, Kanako MORIFUJI<sup>3</sup>, Naoko YAMAMOTO<sup>3</sup>

Yuko NAKAO<sup>3</sup>, Hatsumi TANAKA<sup>1</sup>, Michiko DOI<sup>4</sup>, Miyuki ARAKI<sup>3</sup>

1 Nagasaki University Hospital

2 Japanese Red Cross Fukuoka Hospital

3 Department of Health Sciences, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

4 National Hospital Organization Nagasaki Medical Center

Received 30 August 2013

Accepted 2 November 2013

**Abstract** In the present study, a questionnaire survey was conducted on 28 mothers of low-birth-weight infants admitted to the neonatal intensive care unit regarding factors promoting positive feelings towards their child. The most common factors directly related to the child comprised 'improvement of the child's condition and development', and 'receiving daily updates regarding the child's condition'. Other often-cited factors included 'feeding-related occurrences', 'affectionate involvement of medical staff with the infant', and 'support from husband, friends and acquaintances'. In consideration of the limited time mothers can spend with their child, the present findings suggest that effective intervention strategies that medical staff can use to promote the mother's positive feelings towards her child involve 'providing mothers with information regarding their child's condition and approaches that promote involvement with the child', 'providing active support for maternal feeding of the child', 'appropriate care with the child' and 'providing guidance to help the father support the mother'.

Health Science Research 26 : 7-13, 2014

**Key words** : positive maternal feelings, low-birth-weight infants, neonatal intensive care unit